

中國古代史學の收穫

貝塚氏の近著「中國古代史學の發展」を讀む

重 澤 俊 郎

前清の末葉殷虛の出土品が始めて學問的研究の對象と爲つてから、甲骨文や金文に對する一般の認識は頗る進み、其の後引き續いて行はれた科學的且つ綜合的研究の結果は、此の兩種の遺物が古代史研究上極めて重要な資料たることを愈々明かにしたのである。今日に於いて中國古代史や言語を尙くも科學的方法を以て取り扱はむとする人であるならば、此の兩種の資料に無關心では到底濟まされるものではない。金文甲骨文の理解はかうした學者に取つて實に絶對の要請に外ならないのである。然るに此の資料は其の性質上一般の文獻と異つて甚だ取り扱ひ難いものであり、内容の正確な理解には特殊の知識を必要とする。此の困難有るが爲めに研究者は卜辭や金文の重要性を熟知しつつも兎角之を疏遠にしたり、或ひは獨斷的な解釋を以て自ら満足するが如き傾向に陥り易い。其の結果は古代史

學の發達に支障を與へ古代文化の闡明を阻害すること實に不測と言はなければならぬ。此の不幸を救ひ甲骨學金文學を學界に普及し正しく理解せしむる爲めには、平易にして且つ學問的な指導書の出現が是非とも必要と考へられた。貝塚氏の「中國古代史學の發展」は實に此の學界多年の要望に應へる貴重な勞作と謂つて差支へ無い。

本書は第一部第二部餘論の三部に大別せられ、首に序論一篇を附する。第一部は資料論で、「最近に於ける中國古代史學の發展」と題し、金文學甲骨文學の歴史的敘述及び編年的研究が其の主要部を爲してゐる。第二部は「新史料を通じて見た殷周王朝の文化」と題し、卜辭を通して殷代の文化を、金文を通して西周の文化を、著者独自の立場から縦横に討究し、其の上中國文明の起源にまで一應論及されて居り、古代文化概

論とも稱すべき性質のものである。餘論は特殊研究で、「殷末周初の東方經略に就いて」以下皆て著者が學術雜誌に發表された論文三篇から成り、第二部の總論的なるに對し各論の形を取り且つ前者を助ける任務を果してゐる。これは言はば舊稿であるから茲に改めて内容を紹介する勞を省くけれ共、假令特殊題目たりと雖も其の研究法並びに立論が全體に關する重要な意味を有する點に於いて、決して看過せらるべきものではない。

さて初めて還つて少しく内容紹介を試みるならば、先づ序論に於いて著者は古代史學の根本的立場の種類や變遷を歴史的に簡明に敘述し、最も非科學的な信古派に對して近來は疑古釋古新釋古と名くべき三學派の發生を見たこと、其の發生の必然性、並びに其の特徴價値に就いて論究されてゐる。そして楊寬氏の代表する新釋古派―疑古釋古を釋古の立場から綜合せる學派―こそ、「現代に於ける古代史研究の進むべき道を暗示するもの」と結論し（二二頁）、日本の學界も「中國に於ける此の學派の進歩を度外視し疑古の領域に閉居して晏如たり得る筈が無い」と警告される（二二頁）。

洵に其の通りである。私は著者が序論の中で試みた各學派の紹介批判に就いては大體に於いて賛意を表するに答かでない。疑古釋古がより高次な新釋古に統一せらるべきは當然の歸結であり、同時に其れは最も新しい古代史學の在り方を示してゐること勿論である。楊寬氏の主張は著者も指摘される如く古史辨第七冊に善く表はれてゐるが、私の見る所ではかうした立場は日本に於いても近年來獨自に發達しつつあり、現在古代史學を代表するが如き學者は既に此の立場を取つてゐるのではあるまいか。今頃依然として單純な疑古の一つ覺えに終始し破壊的効果をのみ追求する者は數に於いて如何に多くとも決して學界を代表するとは言はれない。此の點日本の學界は決して中國に引けを取らないと信ずる。ただ疑古や釋古の何たるかをさへ知らずして徒らに新しい立場を銜ふが如きは多大の危險を招くことに注意しなければならぬ。要するに著者が古來の古代史學史を要領よく展望し、并せて著者自身の立場及び將來の史學の進むべき方向に對して確乎たる見解を最初に表明したのは、極めて有意義な用意と言ふべきである。

著者は司馬遷と崔述に言及し、司馬遷の取つた資料の價值批判の根本態度が遙かに崔述に傳承されてゐると述べて居られる。これに對しては多少の異論が豫想されないでもないと思はれる。崔述の態度は洵に著者の言ふ通りに相異無いが、司馬遷は伯夷列傳では成程「信を六藝に考ふ」とは言ふものの、實際史記に現れた資料取り扱ひの態度は必ずしも然らざる場合があると思ふ。彼の歴史に對する根本的見解は崔述の如く單純でなかつたのではあるまいか。

第一部第一章の主要部は「金文學史」と「金文の編年的研究」とであるが、著者が之に先つて古代資料としての金文の優越性、金文の一般的性格、並びに金文の資料としての限界等に就いての基本論を試みたのみでなく、金文の字體解讀に關聯し小篆古文籀文の關係に對して吳大澂王國維金德建の論證を引きつつ明快な論斷を下したことは貴重な努力と言はなければならぬ。王國維が「史籀篇疏證」以下の數篇に於いて古文籀文を同時代異地域の文字と主張したことは小學界に於ける革命的な發見で、史學的方法の經學的方法に對する優越性を示す好例に外ならないが、此の不動の論

に據つて更に古文字書體發達史上に於ける金文の地位を正しく定めようとした著者の周到な用意は高く評價されてよい。蓋し此の點に就いての正しい認識は金文資料の凡ゆる理解の前提を爲すからである。かうした準備工作の後には著者は金文學が見るべき發達を遂けた漢宋清民國の各時代に就いて其の發達史を概觀し其の内容を批評する。概觀と言つても、例へば漢に於ける張敞、宋に於ける歐陽脩呂大臨薛尚功、清に於ける錢坫阮元吳式分吳大澂孫詒讓等を始め、民國に於いては羅振玉王國維容庚郭沫若諸氏の如く、斯學史上没すべからざる學者の業績に就いては、十分な紹介と傾聴すべき批判とを怠らないのであるから、金文學史に關する基本的知識は遺漏無く提供されてゐると言つてよい。凡そ學問理解の第一歩は常に其の學問發達史の理解に存する以上、金文學史に關する卓越せる研究が金文學に對して有する意義と價值とに就いてはこれ以上贅言を要しないと思ふ。近代金文學の巨擘とも稱すべき王國維に關して、著者は凡そ四つの著しい功を承認する。即ち（一）器形學的研究、（二）金文書體の研究、（三）古代史資料としての金文の利用、（四）科學的方法

に由る金文の斷地的地域的研究が是である。現代金文學を正しく理解し之を基礎として古代史研究の成果を挙げむとするならば先づ王國維の學問の理解が要求されることに對して異議を挟む者は一人も無いのであるが、此の王國維の業績は畢竟上掲第三の功に歸一させることが出来る。他の部面に於ける努力は所詮金文を古代文化資料として十分に役立たせる爲めの準備と言つて差支へ無い。そして之が王氏を俟つて略ぼ達成されたとすれば、著者の言ふ如く前代には文字學の一分科として經學的羈絆を脱しきれなかつた清代金文學の後を承けて、之を全く自由な史學の世界へ移植發育するに成功した民國金文學は實に王氏に依つて始めて基礎が築かれたと言ふ外は無い。此の方向は郭沫若氏に依つて一層推進せられ其の結果現れたものが「中國古代社會研究」であつた。著者は此の書物に對して、

「郭氏の初期の述作である爲め其の金文の解讀利用にも缺陷が有り、決して成功した著作とは見做し得ないが一代の風氣を作つた點は見逃し得ない」(一一〇頁)といふ批評を加へて居られるが、此の評語に含まれる著者の不滿は實に著者の此の新著に於いて完全に補缺

訂正されてゐることに讀者は注意しなければならぬ。尤も郭氏は一昨年「十批判書」を著はして該舊著に自己反省を試み若干の修正を加へたから或ひは著者の批評も多少變容を來すかも知れないが、然し兩者の著書を通して見る限り兩者の間には立場上相當の距離が有ることは否定し得ない。

著者は漢の宣帝の時張敞が美陽出土の鼎に就いて行つた上書を重視し、其の正確な金文解讀の能力を讃へて居る(六一・六二頁)。私は張敞に此の名譽を與へることに強ち反對ではないが、著者が唯一の論據として引用された漢書郊祀志の文に至つては著者と解釋を異にする者である。従つて鼎に對する張敞の根本態度に就いての解釋も亦著者の見る所に一致しない。著者に依れば、敞は鼎の出土地美陽縣が周の祖宗の遺迹でないことを理由として之を私家の祭器と斷じ、以て宗廟に薦見すべしとする有司の議を斥けたことになり、此の點で彼は古代銅器を考古學的遺物として取り扱ふ近世の優秀な金文學者と識見を同じくするものと爲されてゐる。然しかかる結論は少くとも著者の引く郊祀志

の文からは導き出されなれと思ふ。今私見に依る張敞上奏文の大意を記すならば、

郊樂鄧錫の間は周の舊居であるから勿論宗廟壇場祭祀の藏が有る筈である。(従つて其の地から古器が出土するのは當然豫想される所で、何等瑞祥ではない。)今鼎が周の遺迹の一部たる郊東の地即ち美陽から發見されたが、其れは刻苦に依つて周室が大臣に褒賞し其の子孫が宮廟に藏して置いたものたることは明かである。美陽が郊東で周の舊居の一部たる以上周の大臣の舊器が出土するのは豫期さるべき現象で瑞祥とは言ひ得ない。)

昔(武帝の時に)寶鼎が汾陰から現れた。其の時には汾陰の地が古器を藏してゐる筈の無いことが確證せられ且つ其の寶鼎は衆鼎に殊異する偉大なものであつた。(此の爲めに全く瑞祥と考へられて宗廟に薦められたのである。)所が今此の鼎は形も小さく其の上款識が有つて(周の大臣の舊藏品が偶々出土したに過ぎないことは極めて明瞭であるから)瑞祥として宗廟に薦めるべきものではない。

右の如く、私の見る所では瑞祥と爲し得るか否かが宗

廟に薦めるべきか否かの分岐點とされたのであつて、著者の如く鼎の出土地が周の遺迹でないとか鼎其のものが私家の祭器に過ぎないからと言ふが如き觀念は張敞の上奏文には全く存せざることである。のみならず「今鼎出土郊東」と言ふ文は美陽を郊の範圍内に置かんとする語氣で著者の言はれる如く之を郊外に遠ざけんとする意味ではない。これは文氣からも地理的事實からも動かせないと思ふ。以上の解釋にして誤り無しとすれば、出土地の條件を古器の價值決定の一標準とする金文學者としての優秀性が果して張敞に與へらるるや否や大いに疑はしくなるが、兎に角彼も著者が非科學的態度とする瑞祥觀念に相當強く支配されてゐたことは確實と謂はなければならない。然し張敞は鼎の銘支を大體誤らずに讀破した以上、彼を金文學の開祖とする結論を否定する必要も無いが、郊祀志の解釋には著者と私との間に非常な差異が感じられたので廣く讀者の批判を俟つことにした。

金文を古代史の資料として驅使する爲めには先づ其の價值を正しく知ることが必要であるが、其の總ての前提として強く要請されるのは其の製作年代の吟味に外ならない。金文の編年的研究が此の學問の重要な一

分科を爲す所以である。著者は先づ殷代金文に就いては維振王以來用ゐられて來た方法の不備を例證し、最も確實と見做すべきは王國維馬衡等の立てた所の卜辭との比較法、具體的には日月倒鉞形式及び特殊祭祀人方征伐記事等の存在に根據を求める方法なりと斷じ、周代金文に就いては郭沫若吳其昌兩氏の說に賛意を表しつつ、所謂個別的方法を退けて群別研究法を推し、此の方法に依つて西周金文は初期（康王まで）中期（昭穆二王）後期（共王より幽王まで）の三時期に區分すべきであると結論して居られる。此が貴重な結果たるは固より多言を要しないが、同時に斯る主題に關する論證の過程に於いて多くの史實、例へば康宮が年の豊凶を支配する社神の廟である事、「周公子明保」が周の公子明保の意味で孔子が夢みんと欲した周公を指し、従つて周公名は旦字は明なる事（一四六頁）などを解明した點も亦看過してはならない。結論の當否は讀者の判斷に委せるとしても、問題を提起し新資料に由る解決の方法を示しただけでも少からぬ功績と謂へるであらう。

著者は西周の金文を論ずるに當つて周に關する舊文獻特に尙書との關聯を常に念頭に置いてゐる。これは

無論正しい態度であり又かくして提出された結論も支持せらるべきものが多い。唯殷文化が周民族の教養の中に浸潤する度合ひと尙書各篇の措辭文體の變遷とを餘りにも嚴密に對應せしめ、此のみに據つて尙書各篇の成立年代までを細かく決定せんとするに至つては（一五五頁）著者が他の場合に「文體の鑑別は免角主觀的な獨斷論に陥り易い」（二七九頁）とし「本質的には擬古文である」（同上）として戒めてゐる慎重さと少し均衡を失ふやうである。

以上第一部が資料其のものの性質を主對象とする資料論より成るに對し、第二部は此の資料を實際に使用して殷周文化を究明したもので、従つて此處では多くの前人未發の説が學者を啓發するのみでなく、新資料活用の際に於ける著者の科學的細心と大膽とは多くの古代史研究者に對して深い反省と爲るべきことに注意しなければならぬ。第一章「中國文明の起源」は既に略ぼ學界の定論と爲れる事柄を再確認したものである。所謂仰韶文明の概念を確立したアンダーソン博士の業績は固より驚嘆に値ひすが、其の河南陝西出土品を基礎とした文明起源の解釋が甚しく當を失してゐることは否定し得ない。ア氏の說に對しては周知の如

く夙にカールグレン氏の反駁も現れ一時東西の考古學界を賑はしたものであるが、著者が此の問題に關しては僅かに濱田博士の説を略引するに止つたのは、讀者の知識に信頼した爲であらうけれども、問題が不當に輕視されて可いやうな誤解を生ずる懼れ無しとしな

い。
さて第二章では、卜辭を通して殷代の文化が多角的に詳細に研究されてゐる。其の結論を要約すれば、殷人は經濟的には遊牧農耕併用者であり、種族的には本來山東以東を根據とする東方民族であるが、盤庚の時河南平原に侵入し其の地に定住せる純農耕種族を征服して所謂殷虛に殷王朝を建設した。其の王朝は政治的には神政國家であり社會的には類別親族組織と密接に關係する氏族制度を有してゐた。此の見解自體は根本的反對を豫想せしめざる妥當性を有して居り、其の意義は總括的に言つて二つに分けて考へられる。一は從來史獻のみに基礎を置き多くの蓋然性を排除し得なかつた問題を、新たに同時資料を以て確實度を高め或ひは修正したこと、二は數多の隨作的個別的課題を解決又は提出したことである。最も注目を引くものとして殷周の關係に就いての考論が有る。此は第三章でも周の

側から詳細に論究されてゐるが、要するに周が本來西方高地に住した非農耕民族なりとする舊説を破り、周は最初山西汾水地方に居り殷の西遷に依つて征服された純農耕民族の一部であつたが、後年殷の爲めに西方に驅逐されて岐山地方に移つたといふ新説を樹立する。即ち周が周侯の名の下に武丁時代から既に卜辭に頻見し又殷が犬侯をして周を征伐せしめた卜辭記事等を主なる出發點とし、往年錢穆氏の提出した説（燕京學報下）を新資料に依つて補強したものである。此の際當然明かにすべきは兩民族の有した文化の性質と程度であるに拘らず、此の點著者の見解が明瞭に讀み取れないのは遺憾である。著者は城子崖に於ける殷族の遺蹟などから農牧併用の殷族が周族より遙んだ文化を有したと斷定しつつ（二五九頁）、一方「周民族は遊牧生活から脱しこの恵まれた自然的環境を爲す山西汾水地帯で農耕を主生業としつつ繁育した」（三一五頁）「殷王朝の征伐進寇の對象と爲るに足るだけの財力富力を其の首都に集中し、當時の邊境の侯國としては可成り高度の生活を遂つてゐたと想像される」（三一四頁）とも言つてゐる。且つ著者の表現を借りるならば、周は「良好な自然の中で、農耕を營なみ且つ鹽池の利を控へ

て富裕な生活を送り」(三一五頁)、「多年養ひ來つた實力から飛躍的な發展を遂げ」(三一六頁)、「末期の殷王朝はもはや東夷民族の文化を純粹に持ち続けることが出來ず、土着の中原の文化に同化せられてゐた」(三四〇頁)のである。若し斯くの如く經濟的に充實してゐたとすれば其の背後には高度の文化の存在が當然推知せらるべく、又武力的勝者を文化的に同化し得る實力が中原に發達してゐたとする以上其の文化段階は言はずして明かと謂はなければならぬ。斯る問題は或ひは新資料を通して殷周時代を研究せんとする當面の課題を離れてゐるが爲めに深く論じられなかつたのかも知れないし、又著者自身固より成見を有せられるに相異無いとしても、殷周關係を論ずるに際して極めて大なる比重を與へるべく決して曖昧の中に放置して然るべき性質のものではないと思ふ。

殷が初め神政國家であり、時代と共に人政的國家へと轉化したとする著者の説に反對する學者は先づ有るまい。従つて此の變化に應じて王者の性格が司祭長的な最高の聖職者から政治的權力を一身に集中した世俗的君主へと變つたことも亦勿論肯定される。著者は此の事實を卜辭の形式上の變遷に依つて説明する。即ち

第一期から第三期迄の王親貞形式の卜辭は王が自ら貞人の職を掌つたことを示し、又王繇辭附加の卜辭例は王が兆の吉凶を判斷して自ら繇辭の宣告に任じたことを示すと爲し、之を以て王の巫祝的性格の證左と見る(二七九頁)。然るに第五期の王親卜貞形式卜辭は貞問を専門の貞人に委ね、王自身は龜卜骨卜を行ふ政治社會の主權者として世俗的權威を以て卜に臨むに至つたことを物語ると解釋し(二八〇頁)、此の變化こそ王並びに國家其のものの性格の變化を反映するに外ならずと論斷する。王の親貞が其の巫祝性を示すとする點に關しては異論の餘地は無いが、第五期の王親卜貞が何故に自ら卜に臨むのみで貞問を専門の貞人に委ねたことを表示するかに就いては積極的説明が要求される。若し一身にして親卜と親貞とを兼ね行ふ所に其の理由が求められるならば、多子族の族長たる子が親卜貞を殷代初期に於いて既に行つてゐる事實は如何に解釋せらるべきであらうか。王が純宗教的權威者として神政を行つてゐた時期に、獨り多子族の統率者のみが龜卜を輕んじ自ら世俗的權威を以て臨んだとは考へられないのではあるまいか。少くとも此の點に對しては今少し説明を要すると思ふ。

著者は更に第三章に於いて全文を通ずる周代文化の研究に進む。新資料は舊文獻との連繫を密にしつつ巧みに利用せられ、其の缺を補ひ其の誤りを正すに役立つてゐる。そして前述した周民族の起源及び發展史に關する新説の提出を初め、周文化の建設者としての周公の獨創性に就いての疑義、換すれば周の文物制度に存する殷文化への模倣度の問題、宣王の政治の歴史的意義等頗る示唆に富む論議考證が展開されてゐる。周の精神文化に就いて其の特徴を殷代の定命論から非定命論への轉換に求めた著者の着想は（三五〇頁）、此の相反する一つの立場が神及び人間の權威の支配をそれぞれ代表してゐる限り當然是認せらるべきである。然し此の重大な轉換が一周公に於いて急速に行はれたことを尙書大誥篇の孤證を以て成立せしめんとするのは性急に過ぎると思はれる。大誥篇の文獻學的取り扱いに就いても論議の餘地を存するのみでなく、精神的問題は斯くも率爾の間に處理し了るべきものではない。著者は定命非定命の兩者を同時存在の矛盾觀念として政治的發智の結果と見做す郭沫若氏の態度を寧ろ過ぎた解釋として排斥するが（三五二頁）、著者の駁論が果して十分な成功を収めてゐるか否かは讀者の判斷

に委せることにしよう。精神史を抽象的に獨立せしめて取り扱ふ立場は私には賛成出来ない。

以上甚だ不完全な紹介の中に些か吹毛求疵の愚を敢てしたが、之は要するに批評と言ふよりは寧ろ希望とも言ふべきもので、其の至らざるは著者並びに讀者の寛恕を請はなければならぬ。思ふに近三十年來中國古代史學の發達は洵に端倪すべからざるものがあり、斯學は内に向つて其の深度を増すと共に外に向つて其の範圍を著しく擴大した。此の間に出現した極めて多くの成果は既に根本的な整理統一を要する段階にまで達したのである。今に及んで之を爲さずんば古代史學は自らの成果の負擔の故を以て新しい發展を阻まれる恐れ無しとしない。本書は斯る歴史的要請を背後に荷ひつつ現れたものであるが、此の重大な使命は著者只塚氏の學殖に依つて略ぼ果されてゐると言ふも決して溢美ではないと信ずる。同時に此の歴史的要請が本書に或る限界を與へてゐることも亦否定し得ないのであるが、之は著者としては寧ろ利めから意識された所であらうと思ふ。讀了一過、著者の功績に敬意を表し、古代史將來の發展の新たな基礎が本書に依つて築かれたことを喜ぶ者は私一人に止るまい。（一九四七年三月）